利根川の河口付近、鹿島灘の近くに位置する工場。川とはレールでつながっている

普段は水中にある船底

一つひとつ丁寧に組み立てる

アルミ板から流線型の船ができあがる

特集

神栖ディスカバリー File 22

# 造船所

## ―船造りの歴史と進化―

**私たちの暮らしや産業は、さまざまな船と深い関わりを持っています。それらの船は、どのように造られているのでしょう？**
**今回は県内唯一の造船所を訪ねました。造船のあゆみから最新の船づくりまでご紹介します。**

### 江戸時代から続く造船所

周りを海に囲まれた日本は、世界第3位の造船国。太平洋と利根川に挟まれた神栖市は古くから漁業が盛んで、平成まで渡船が活躍し、鹿島港が世界に開かれた海の玄関口となるなど、さまざまな船が暮らしや産業と密接に結びついてきました。この神栖市に、茨城県で唯一の造船所があるのをご存じですか？

今回訪れたのは、波崎地域にある平山造船所です。今から200年以上も前の文化14年、西暦1817年に創業し、現在は9代目となる平山文丈（たけ）さんが代表取締役を務めています。まず、これまでのあゆみを聞きました。

木造船。波崎では大正以降、動力化が進んだ

「創業当時は、木造船の船大工でした。昭和初期のころは利根川の河口近くに、うちを含めて10社ほど造船所があり、戦時下には一時的に各社がまとまって国の要請で物資輸送船を造ったこともあったそうです。

その後、大きな転機は1963年に木材から鋼材へと船体の材料が変わったこと。1974年には全天候型作業工場を建て、製造環境も充実しました。1980年代は日本中が造船不況に見舞われましたが、社員一丸となって頑張ってくれたおかげで今があるのだと思っています」

1988年には、新たな造船材料としてアルミ軽合金を導入。時代の荒波を乗り越えて、造船技術を進化させてきました。

船造りを支える平山造船所社員の皆さん

### 漁船や観光船、水陸両用バスも

平山造船所が造る船の種類は、驚くほど多岐にわたります。漁船だけでも、19トン級のさんま漁船から3トン以下のしらす漁船、まき網漁を支える作業艇やレッコボートなどさまざま。また、消防艇、海洋土木作業船、給油船、交通船、作業船、プレジャーボート、さらに官庁からの依頼で取締船や水質調査船なども造っています。

旅客船については、神栖市民におなじみのユーリカ号をはじめ、横浜やお台場を巡る豪華な屋形船、なめがたファーマーズビレッジの水陸両用バスまで幅広く手がけています。

しかも、2007年に造った49トン型アルミ軽合金製の屋形船は国産初、2017年に造った水陸両用バスは茨城県初で、技術力の高さを証明しています。

造船所は新しい船を造るだけでなく、船の修理やメンテナンスも重要な仕事です。「漁船の油圧ホースや配管が破れてしまい、翌日の出航に間に合うよう修理してほしいなど、急な依頼が重なることもあります。また、安全に航行できるよう定期的なメンテナンスも担っています」と語る平山さん。他の造船所で造った大型船の修理やメンテナンスにも対応しており、私たちの身近で働く船をしっかりと支えています。

横浜屋形船

### アルミ板から流線型の船ができるまで

ところで、船はどのようにして造られるのでしょう？　工場を見学しながら、工程を教えてもらいました。

工場は1050平方メートルと、テニスコート5面がすっぽり入る大きさです。真っ先に目に飛び込んできたのは、ほぼ完成に近い20トン級の船。ピカピカ光るアルミ軽合金の船体、黄金色に輝くプロペラ、間近に見上げる船底など、普段は見ることのできない光景に驚きと感動の連続でした。

造船は、主に次のような工程で進んでいきます。

#### 1 設計図をつくる

すべての船をフルオーダーで造るのが特徴です。まず、船主の要望を